

## 9. イネスの涙ペドロの嘆き

わたしがリスボンの青空に感じた哀しみは、その後どこに行ってもわたしにまとわりついて離れなかった。その哀しみの空気はもしやすると事前調査の印象のあまり、わたし自身が醸し出したものかも知れないとも思うのだが、ここにポルトガルの哀しみの源を教えてください、ひとつの歴史上の悲恋物語がある。

その悲恋物語は、この泉「涙の泉」のほとりで1355年1月に起きた。時のポルトガル皇太子ペドロの恋人イネスが、ここでポルトガル王室の貴族達の手で処刑されたのだ。話が長くなって恐縮だが顛末を説明するところだ。14世紀、未だ大航海時代前のポルトガルは、レコンキスタを遂げたとはいえ国内は疲弊していた。イベリア半島の列強の脅威を和らげるため、国境を接しているカスティーリャ国の有力貴族の娘と自国の皇太子の政略結婚を図り、コンスタンサという名の王女がまだ幼くして輿入れしてきた。そして、その侍女として同行してきたのがイネスである。コンスタンサはカスティーリャだけでなく、当時のレオン国やアラゴン国の王とも親戚であるため、この結婚によってポルトガルの安全は保障されることになる。

しかし、皇太子ペドロは自分の意向を一顧だにしない政略結婚に、青年らしい正義感から反感を持っていた。一方でペドロは運命の出会いをしてしまった美しいイネスを見染めてしまう。妻への愛情は湧かなくとも、やがてコンスタンサはペドロの子どもを生む。最初の子どもは生まれてすぐに亡くなり、次の子は無事育ったものの三番目の出産が、難産となり彼女は子どもの誕生と引き換えに亡くなる。

正妻が活着ている間は隠れて逢っていたのだろうが、コンスタンサが亡くなると公然とイネスを近づけ、3人の子どもまで生まれてしまう。そのことをスペイン側に知られて、それを口実に攻め込まれては大変と貴族達の一部が国王にイネスの処刑を申し出、国王の見て見ぬふりの下に密計が進行する。ペドロの隙を見計らって、モンテ・モール・オ・ベリーヨ城に隠棲していたイネスを拉致し処刑してしまう。



イネスが処刑された場所には湧水があり、「涙の泉」と呼ばれている。泉の底の石は今でも赤く染まっていて、処刑の時のイネスの流した血の色だとされている。涼しげ泉の持つ悲しい歴史が、この国の宿命的な隣国関係を、現代に伝えている。

それを知ったペドロの嘆きと復讐心はすさまじいもので、父である国王に対して反乱する。その反乱は母親の必死の仲介で矛を収め、しばらくは両親への遠慮から深く静かに潜行するのだが忘れてはいなかった。父である国王が亡くなり、自分がペドロ1世として即位すると、死者であるイネスと正式に結婚式を上げ、イネスを国王の正妻として埋葬しなおす。恐れをなして国外逃亡していた3人の首謀者も、内2人を捕縛して残酷に殺してしまった。

そのため、国王ペドロ1世は賢王としての誉れも高く「正義王」の名で称賛される一方で、残酷な復讐をした「残

酷王」とも呼ばれていたそうだ。

この話にはいくつもの悲劇が重なり合っているが、わたしはイネスやペドロより、むしろ皇太子妃コンスタンサの悲しみに同情したい。政略結婚の犠牲になったのはペドロよりも、むしろコンスタンサだっただろう。にも拘らず夫ペドロは、幼稚な正義感から妻に心を開かず、おなじスペインから連れてきた侍女を愛してしまう。コンスタンサの夫に対する妻としての愛は深く強かった。幼くして親元を離れて異国に嫁いできたのだ、頼るのは夫しかいない。にも拘らず報われぬままに亡くなっている。彼女の孤独感と悲嘆はどれほど深かったかと思わざるを得ない。

もちろん、非業に死んだイネスもまた悲劇のヒロインであることに変わりはない。彼女はペドロ1世の正式の妻になり、ペドロとともに棺を向い合せて眠っている。しかし、如何に死後の名誉を得たとしても、傾城の汚名を着せられて死んだ彼女の哀しみは深かったに違いない。

3つ目の悲劇は3人の貴族たちである。ひとりは命からがらイギリスに亡命できたが、2人はペドロ1世によって語るもはばかれるほどむごい殺され方をしている。しかし、彼らはポルトガルの国家安全保障上、最善の策として政略結婚を図り、その永続性を願ってイネスを殺したのであって、私怨を晴らすためのものでも、ましてや敵国に通じてのことではなかった。イネスを殺す必要があったかどうかについては、ペドロ1世に対するスペイン側の王たちの対応からすると疑問が残る。長い間のイベリア半島の王家の交流で、ペドロ1世自身、スペインの王たちの親戚であることには変わりはないし、イネスもまた貴族の娘として遠縁には当たっていたのだから。

最後の悲劇はペドロの両親であろう。父アルフォンソ4世と母ベアトリーチェは思慮深く、温厚という評判が伝わっているが、それだけに隣国の脅威を毅然と跳ね返す迫力に欠けていたのだろう。情においては息子の心情を認めつつ、政治的には隣国の脅威を打ち消す方策としてイネスを殺すことを黙認している。イネスの死後、ペドロは父親に対して反乱軍を編成して、一度は国軍と戦っている。隣国からの脅威どころか危うく国を二分するところだったのだ。母親ベアトリーチェの必死のとりなしで、ペドロは剣を収めるものの、彼の復讐心は彼の死まで消えることはなかった。両親は死んでも死にきれなかったことだろう。

ともあれ、イネスとペドロはアルコバッサという町のサンタ・マリア修道院に華麗な大理石の棺を向い合せて並べて眠っている。復活の日に目覚めた時すぐに、顔を合わせることができるようにと、ペドロがそうしたのである。イネスにしてみれば、死後のこととはいえ、これだけ愛されていることで、持って瞑すべしと言える。一方のコンスタンサの孤独と悲しみを、ペドロがどのように感じていたのかを考えると、些か腹立たしくもあるが、彼女がどこに眠っているか、ついに分からずじまいであった。



「涙の泉」の石碑には不思議な年号が刻まれている。1580年はポルトガルがスペインによって併合された年だ。それもまた確かに、涙なくして語れぬということだろうか。